



パリの青い空（筆者撮影）

私は青い空が好きだ。外国の空もずいぶん見たが、やはり住んでいたサンフランシスコとパリの青空が大好きである。アメリカ駐在時マンハッタンに6年滞在したが、1年だけサンフランシスコで働いた。地中海の都市に似たサンフランは海に隣接し坂道が多い。その坂道沿いに真っ白な建物があり、坂道を上り切ったところに突き抜けるような青い空、真っ白な雲が見え独特の美しさがあった。今思うと、当時フィッシャマンズワーフ近くのテレグラフヒルに住み、週末にはゴールデンゲートブリッジを渡って対岸の高級リゾート地サウスリートまで散歩するという豪華な過ごし方だった。時々、アルバート・ハモンドの「カルフォルニアの青い空」をかけながら、海岸沿いのルート1を南に向かってドライブした時代が懐かしい。

パリの青い空も気に入った。パリには海はなかったが、札幌よりも北にあり、くっきりした青い空と白い雲、ゆっくり流れる大セーヌがあった。よく晴れた日のパリの空は格別に美しく、サクレクール、モンマルトル、トロカデロなどの風景と一緒に知的で、優雅で、ロマンティックな景色を作る。イヴェット・ジローの「パリの空の下」の歌はそういう風景の下で生きる人たちの夢を語ってくれる。いろいろな歌手が歌っているが、彼女の歌と歌い方が一番パリににあっている。

しかし今、そのきれいで、ロマンのあるパリの空が汚れて危ないのである。1979年からパリ首都圏の空気の質を監視しているパリ首都圏汚染観測所「エールパリフ（Airparif）」によると、パリの空は相当汚れているらしい。2007年と2009年は夏から秋にかけて雨が多

かったこともあり問題はそれほど深刻ではなかったが、2010-2012年にかけて空気汚染は悪化し、この3月にフランスはEU司法裁判所から正式に“空の汚れ”でお叱りを受けた。

大気汚染の原因には一酸化炭素、二酸化硫黄、二酸化窒素、浮遊粒子状物質、オキシダントなどがある。いま、問題になっているのは家庭の暖房、都市、工場、自動車、地下鉄などから出る浮遊微小粒子である。PM10とかPM2.5とか呼ばれ、空中に浮いている粒子状物質の程度を表す環境基準で英語で浮遊微小粒子SPM (Suspended Particulate Matter)、フランス語で particules fines en suspension dans l' air と呼ばれる。

PM10は粒径10マイクロメートル以下の粒子を指し、その中でもさらに小さい微小浮遊粒子PM2.5は粒径2.5マイクロメートル以下の粒子を指す。浮遊微粒子は人体に入れば肺、呼吸系などに影響があり、高齢者、幼児、妊婦にはぜんそく、心臓病などに影響があり死に至るので注意が必要である。以前から問題になっている一酸化炭素は大量に吸い込むと呼吸難から呼吸停止を引き起こし、二酸化硫黄は「四日市ぜんそく」のように呼吸系を犯し、二酸化窒素やオキシダントは酸性雨や光化学スモッグの原因となり呼吸器などに影響を及ぼす。

パリといっても広い。狭義では山手線の内側ぐらいのパリ20区、パリ周辺を入れたパリ郊外圏、隣接県をいれた大パリ圏(イル・ド・フランス)に分けられるが、パリの空気汚染では一般的に人口300万人を持つパリ郊外圏を言う。特に、パリと郊外の間を走るペリフェリックや高速道路が集中していて車の排気ガスが多い。エールパリフが8つの空気汚染観測器を設置し24時間空気の汚れを計測している。EUは2013年を「欧州空気清浄年(L' année Européenne de l' air)」と決めた。今年も1年目であり、また、空気汚染問題は外部性伝搬力があるのでよりシヴィアに受け止めている。EUは違反国に対して厳しく対処し、警告や罰金を課し始めた。

政府、パリ市、イル・ド・フランスも環境改善にいろいろな政策を打ち上げ努力してきた。イル・ド・フランスは2015年までに汚染物質の排出を15%削減し、2020年には正常な空気を取り戻す計画「2020年：空気の洗浄化プラン」を進行中で、パリ市では社会党系で環境派のベルトラン・ドラノエ市長(2001-2013)のイニシアティブで、「Paris respire(息のできるパリ)プロジェクト」が進行しており2020年までに、パリ市内の自動車交通量を40%縮小させる予定だ。

すでに実施しているものとして、2006年に始まったパリ郊外4路線「トラムウエー」(Tramway)の復活、2007年の乗り捨て自動車貸し出しシステム「ヴェリーブ(Velib)」、2011年には電気自動車を使った世界最大のカーシェアリング「オートリブ(Autolib)が始まった。また、2008年からは世界初めての首都圏大気汚染観測気球「エールパリフ」が打ち上げられ、150メートルの上空で二酸化炭素、オゾン、粒子状物質の濃度に応じてグリーン(良)、オレンジ(並)、レッド(不良)と色が変化し警告を発している。

しかし、空気汚染は空だけでない。地上では「タバコ喫煙」による空気汚染がひどい。タバコはどこの国でも頭の痛い問題だが、フランスでは、ヴェイユ法(1976)、エヴァン法(1991)、改正エヴァン法(2007、2008)で全公共施設(職場、交通機関、学校、病院、駅、カフェ、レストラン、駅、美術館など)、民間公共施設(カフェ、レストラン、クラブ、カジノ、バーなど)の室内全面禁煙が徹底してきているので室内禁煙は良くなった。

問題は室外である。室内での喫煙が厳しくなったせいで喫煙者が路上にあふれ、特に昼休みやコーフィブレイク時には狭い歩道を喫煙者が占有して通れないほどである。喫煙が終わった後、人がいなくても厚い煙だけが残っていることもしばしばだ。ちなみに、フランスは喫煙率(WHO)は総合で31.7%で14位(日本は26.3%で19位)、男性の喫煙率は30.6%で12位(日本は36.5%で4位)、女性は22.3%で5位(日本は低いほうから4位)である。

フランスは全体ではそれほど高くないが、男性の喫煙率はG7の中では1番高く、女性の喫煙率は世界5位と非常に高い。フランス人の話では女性の喫煙率は就業率と関連があり、フランスは働いている女性が多いので喫煙者が多いという。たしかに、OECD(2012)の就業率をみると女性の就業率は75%、10位(日本22位)と高く、OECD(2013)の「ガラスの天井指数」でもフランスは11位(日本22位)とより多くの女性が働いている。したがってストレスが高く喫煙率が高いというわけだ。

以上の考えをフランス人の友人に話したら耳の痛いコメントが返ってきた。「空気汚染の問題は世界の大都市共通の問題だが、室内禁煙はフランスより日本のほうがひどい。フランスは2008年の法律で室内禁煙完全実施だが、日本は法律もゆるく分煙と禁止の両方がある統一されていない。たとえば居酒屋、コーヒーショップなどよく行くが、禁煙席と喫煙席は分けてあるがあいまいで喫煙者の煙が漏れてくるところが多い。飲み屋など飲むところはたいてい喫煙が許されているので、煙のない飲み屋は飲み屋でないみたいだ。伝統的な日本料理レストランやすし屋でさえもカウンターだけ禁煙という店が多い。チェーン店のコーヒーショップなどカウンターの中で働いている若者の健康を無視している。パリの路上の喫煙はよけて通ればすむ話だ」と言われてしまった。たしかに、フランスのほうが完全禁煙は徹底しているようだ。

フランス人がそういうのもフランスは改革意思の強い国で、昔から都市の美化や環境改良を実施してきた自信と自負心があるからだ。19世紀にはナポレオンが「新しいローマ計画」で多くの公共建造物建築を作りパリの空間を拡張した。その後、ナポレオン3世の指示のもとセーヌ県知事のジョルジュ・オスマンが「パリ大改造計画」によって上下水道、道路拡張、公園建造、衛生環境整備などを行った。20世紀にはド・ゴール、ポンピドゥー、ジスカール・デスタン各大統領による「パリ大開発計画」があり都市の近代化と環境整備を行った、その後ミッテラン、シラク大統領によるさらなる「パリ近代化計画」があった。グラン・プロジェは脈々と受け継がれているのである。

サルコジ、オランド大統領もこの伝統を受け継いでいる。サルコジ大統領が任期後半に「グラン・パリ(Le Grand Paris)計画」を発表し、パリ市、パリ郊外圏を含むイル・ド・フランスに住む1,500万人を対象とした遠大な計画を打ち出した。オランド大統領は、今年3月「グラン・パリ計画」を引き継いで毎日通勤する850万人の公共機関混雑緩和のための「新グラン・パリ計画」を発表した。それを受けて、エロー首相がその一環として交通政策「グラン・パリ・エクスプレス計画」を発表した。通勤の緩和のために現メトロを延長し郊外をつなぐ新メトロネットワークを敷設し、総計200キロメートル、新駅72駅を設けて総工費300億ユーロ(約3兆6,000億円)の予算で完成は2030年を目指す。

パリはこのように過去から現在まで地上空間と地下空間の継続的改善に力を入れてきた。次の目標は「大気空間」のグラン・プロジェである。京都議定書のスピリットをもう一度振り返

り革新的なグラン・プロジェクトで「大気空間汚染」の問題に真剣に取り組み世界のモデルを作ってほしい。

イヴェット・ジローの「パリの空の下 (Sous le ciel de Paris)」の一節に「L' espoire fleurit au ciel de Paris」というくだりがあるが、パリは青い空が似合い「空が青いと、人々の希望の花が咲く」都市なのである。

(2013年5月30日)